

イーヴリン・ウォーと「戦争三部作」

荒井 聰子

1. Evelyn Waugh の戦争体験

イーヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) (1903-1966) はフルネームを Evelyn Arthur St John Waugh と言い、出版社 Chapman & Hall の専務取締役であり文人としても名をなしていた父 アーサー (Arthur) と母キャサリン (Catherine) の次男としてロンドンのハムステッドに生まれた。父方、母方ともに医師、軍人、教会人、知識人などを出している英国の「プロフェッショナル クラス」の家系であり、母方の先祖には貴族称号を贈られた者もあるという、いわゆる上層中流階級の家系である。5歳年上の兄アレック (Alec) も青年時代から名声を得ていた小説家であり、同じ道で追いつき追い越すことになる弟の才能にも理解を示し、精神的にも彼を支えたよき兄であった。

イーヴリンはランシングスクールからオクスフォード大学のハートフォードカレッジに進み、入学試験成績の優秀者として給費学生の身分で歴史学を専攻したが、正規の勉強よりも友人との華やかな交際や学生活動に忙しく、卒業試験成績不良のため学位を得ないままに1924年6月に大学を離れた。しかし、自伝「いささかの学び」(*A Little Learning*) で「わたしのそこ[大学]での生活はつまるところ友情の目録である」¹と言っている通り、大学生活3年間に得た多くの友人と彼らとの交際を通して触れた上流階級の生活と文化は、彼の生涯の好みと文学の内容を決定する基盤となった。こうした流れの中で彼は同名の女性(友人間では He/She-Evelyn として区別されていた)との恋愛、結婚、離婚を経験し、苦悩の中での探求を経て1930年にはローマンカトリックに改宗した。原則として離婚を認めない教会の信徒として、時間をかけた教会内の審査によって最初の結婚は無効と宣言されたので、1936年に旧カトリック貴族のハーバート (Herbert) 家から13歳年下のローラ (Laura) を生涯の伴侶として迎え三男四女₂を得た。

1936年はピカソの「ゲルニカ」に描かれたスペイン内戦の年としてヨーロッパ史では記憶される年である。1931年の革命によって成立した「人民戦線政府」に対してフランコ将軍を立てた旧勢力が巻き返しをはかった内戦であるが、内政不干渉の国際協定を破ってヒトラーが干渉したところから、前年のムッソリーニによるエチオピア併合の引き起こした危機感とも結びついて国外からは民主主義対ファシズムのヨーロッパ危機と受けとめられ、スターリンが共産党主導の「国際義勇軍」を組織して送り込んだのに触発された多くの文化人がヨーロッパ各国からスペインに潜入して政府軍側の義勇軍に参加した。勿論現実はそのような単純なものではなく左翼勢力の内部抗争の絡んだ複雑過酷なものであったことはジョージ・オーウェルの「カタロニア賛歌」に描かれた通りである。イギリス文学においても1930年代は詩人や作家たちが多かれ少なかれ「赤」で象徴される共産主義的革命思想の影響を受けて左傾したところからピンク時代（pink decade）とも呼ばれるが、その中でイーヴリン・ウォーは右傾の姿勢をとる異色の存在であった。

カトリック信仰と教会に対しては改宗者、イギリスの上流社会に対しては他所者であったウォーの双方に対する心酔は強烈に意識的なものであった。内面に極度の不安定と美しさものへのあくなき欲求を抱えた彼は不変にして普遍的なるもの、歴史の波を超えて美しき文化（civilization）へと累積してきた伝統に深い愛着をもっていたが、その土台にあった庶民階級の生活や苦楽に関心を寄せることはついぞ無かったようである。イギリス社会の中では古い信仰と上流社会の文化伝統を合わせて歴史的に体現しているのがカトリック貴族たちである。イギリスの近代キリスト教は16世紀に起こったヘンリー八世の宗教改革以来、政治的に正統とされた英国国教会に対してローマ教皇を頭とする教会の信仰を保とうとするローマカトリックの拮抗、それに少し遅れてはピューリタンその他の非国教プロテスタントの流れが歴史を形づくっている。政教分離がなされていない時代には歴史の曲折にしたがってそれぞれに殉教者を出しているが、カトリックの場合には数世紀にわたる組織的な迫害で信徒も教会も姿を消し、現在庶民レベルのカトリック信者には時の為政者に脅威を与えるほ

どの存在感のない階層で、職あるいは食を求めてアイルランドやスコットランドから渡ってきた者の子孫が多いようである。こうした中で、イングランド系カトリック信者の伝統は、宗教改革以前に遡る有力な貴族の家系が数世紀にわたる迫害と財政的圧迫に耐えて19世紀半ばの夜明けまで潜伏司祭たちを匿い一族郎党の信仰を守り抜いたことによって保たれて来たものという。これらがイーヴリン・ウォーの小説の中でしばしば主要人物群を形づくるカトリックの「国教拒否家族」(recusant families)である。信仰と伝統と富を骨子とする文明(civilization)観に立ち、善意は豊かに持ちながらも極めて自己中心であったウォーの意識の中では、無神論・唯物主義は悪の根源であり、旧い秩序と伝統文化を損なう近代化や合理化は文明破壊であるとする固定概念が出来上がっていたようである。したがって唯物的科学に基づく合理性を原動力とする左翼的風潮に対しては価値観と感覚的好みからして強固な否定の砦に立てこもっていたことになるのである。

スペイン内戦では教会を破壊する人民戦線への対抗勢力としてフランコ側を支持し、イタリアに関してはアビシニア特派員として目撃したファシストの活動や個人的にインタビューしたムッソリーニに好印象を持っていたこともあり、未開の地アビシニアに文明をもたらす力としてイタリアのファシズムを評価した。ドイツへの姿勢はプロ・ヒトラーととられることもあったが、概して否定的であった。いずれにせよ、独、伊、スペインを一括してファシスト勢力とし、攻撃の対象とする一般ジャーナリズムの風潮とは一線を画していたために、ファシストあるいは右翼的と言われることが多かった。しかしウォー自身としては、「不人気で負け戦と(わたしに)思われていた間はイタリア支持も面白かったが、今や勝利者となったファシストには共感が持てない」³⁾というわけで、1939年7月スペイン内戦がフランコの勝利で終結し、8月末に「独ソ不可侵条約」によって共產主義国ソ連とナチスドイツが手を携えてカトリック国ポーランドを脅かすに至ると、9月初め、フランスとともに対独宣戦布告に踏み切った自国の「戦争努力」への参加を積極的に望んだ。作家の戦争協力としては言語能力を生かして政府関係や報道関係機関で働く道もあったが

ウォーは実戦参加を望んで軍隊に志願した。しかしながら36歳の小説家の内心の志望動機は政治的・道徳的判断よりも創作の刺激となる生きた体験の魅力であった。大義のために命を捧げる姿にヒロイズムを感じて一兵卒としての入隊を夢見たが、現実には短期集中訓練によって士官を養成する試みを始めていた海兵隊（Royal Marine）への入隊であった。

訓練は1939年12月7日小尉としてチャタム海軍基地での入隊に始まり内容に従って場所を変えつつ行われたが、入隊当初は歴史を誇る海兵隊本部の建物や内装、先輩将校たちの紳士的な歓迎など、すべてが気に入ってウォーはしばしのハネムーン期を過ごす。これが彼の軍隊生活の原体験となり英国軍隊の在るべき姿の尺度として彼の内に根を下した。しかし実戦の場に誇り高く典雅な紳士の雰囲気 が保たれる筈もなく、出発点での満足は訓練が進むにつれて幻滅につながっていく宿命にあった。同期の仲間うちでは高齢の故に「ウー小父さん」と呼ばれたウォー小尉の訓練成績は優秀で特に勇気と自信が評価され、最初の5か月終了後のランシントン（Lunshington）中佐による報告では、今少し軍隊経験をつめば「第1級の中隊長になるだろう」⁴とまで言われたが、軍隊という厳しいヒエラルキーの中で機能する組織にはまったく不適合である上に、労働者階級出身の兵士を統率する隊長としても衝動的な怒りや侮蔑的な言動で失格となる。1940年5月初め大尉に昇進し中隊長に任じられたものの、8月にはダカール作戦参加のための移動中、彼の部下に対する理不尽な怒り方を見て驚いた司令官ランシントン中佐が戦地到着前に彼を中隊長から大隊付情報将校（battalion's Intelligence Officer）に降格して戦闘部隊からはずしたほどであった。ウォー自身は自分のキャリアが思い通りに進展しない原因が自分の人格にあるとは思わず、何者かに阻まれていると感じていたという。自ら招いたこととは言え非戦闘要員としての役割しか与えられない立場になり、その上参加した三つの作戦がいずれもヒロイズム発揮の機会とは程遠く様々な事情から不発に終わるものであったことは皮肉であるが、これは同時に連合軍の共同作戦というものの複雑さを示しているのかもしれない。

ウォー大尉として彼が関わった戦闘の最初は西アフリカの仏領の街ダカール

をドイツ占領下のヴィシイ政権の支配から奪還してド・ゴール將軍の支配を確立しようとする自由フランス軍（レジスタンス勢力）の上陸作戦援護のための遠征であった。艦隊は1940年9月14日から23日まで予定海域に待機したものの攻撃目標の街はおろか味方艦隊の僚船さえも見えない濃霧にさまたげられ、また手薄と見込まれていたダカールの守備が実は強力な海軍力を備えて英仏軍の威嚇に全くひるまない構えであることを知って作戦がキャンセルされたため拠点フリータウンに引き返した。チャーチル首相の指示にはすぐわない艦隊司令の現実的決定をウォーは逃走と感じて妻ローラに「名誉を犠牲にして流血をさけた」⁵と書き送った。

彼は海兵隊に幻滅を感じていたため、たまたま6月に旅団の境を超えて突撃隊が組織されるという情報を得ると早速ロバート・レイコック（Robert Laycock）の率いる第8突撃隊に志願していた。レイコックは英国軍中でも最もスマートな近衛騎兵連隊（the Royal Horse Guard）の所属で、軍人としての優秀な経歴と帆船の一乗組員として世界一周を成し遂げるほどの強靭さを合わせ持ち、1943年には陸軍少将としてマウントバッテン卿（Lord Mountbatten）の後をついで統合作戦本部長に任じられるほどの軍人であり、「端正さと武人の練達を完璧に調和させた」イーヴリン・ウォー憧れのアイドルであった。⁶ アフリカから帰還の途次入隊許可を受け取ったウォーは、11月から海兵隊所属の大尉としてスコットランドのラーグに本部を置く第8突撃隊の一員となった。レイコックは由緒ある連隊を選んで隊員募集をかけていたのでこの将校集団はウォーの好みに合ったグループであった。

部隊は突撃隊としての訓練を終えて1941年2月には本国を離れ中東に向かう。この遠征中には小規模の戦闘もあったが、ウォーにとって主要なものは4月のバルディア（リビア）夜襲作戦と5月のクレタ島での軍事行動である。この体験が彼の最後の長編小説作品となった「名誉の剣」三部作のテーマとして使われることになる。ウォーの身分はやはり非戦闘要員の情報将校であったがレイコック大佐付きとして部隊中枢部にあって働き、秘書兼個人的助手の役割をはたした。⁷

バルディアはリビア海岸にある街であるが敵の手中にあり、補給路として要衝の地であるため夜襲によって奪回がはかられた。1941年4月19日、2000人規模のイタリア軍守備隊を予想して立てられた綿密な夜襲作戦計画にしたがってイギリス軍が接近して見ると、すでに連合軍の攻略にあつて無人の町と化しておりバイクで巡視中の2人のイタリア兵を見かけたにすぎなかった。肩すかしを食った突撃隊は混乱して味方の将校1名を誤射した上、橋を爆破し備蓄のタイヤに火を放ったが、それによって敵に所在を知らせ、敵勢力の一部をおびき寄せることはできたものの、照明弾をあびて全速力でアレキサンドリアに引き揚げるというアンチクライマックスを演じた。後にウォーがジャーナリストとしての才能を発揮して「ライフ」誌（国際版）に書いた記事の与える印象とは異なり、この作戦で情報将校としての彼に与えられていた役割はタイムキーパーであった。

ヨーロッパ戦線でドイツ軍と対峙することがウォーの望みであったが、それに近いことを期待させたのが翌月1941年5月下旬のクレタ島遠征であった。1941年4月にギリシャとユーゴスラビアがドイツに敗れるとドイツ軍のエジプト進撃を阻むものはイギリス占領下のクレタ島のみとなった。ドイツ軍のクレタ島攻撃は5月20日に開始されたが、イギリス海軍の優勢を知るドイツは新しい戦法として落下傘部隊による攻撃に出た。事前の威嚇警告にも関わらず空からの攻撃を予期していなかったイギリス陸軍は大敗を喫する羽目に陥り、急遽レイコックの率いる突撃隊のB中隊に援軍としてアレキサンドリア経由でクレタに向かう出撃命令がくだった。5月25日戦場に到着して見ると海岸は死者、負傷者に満ちていて、すでに退却命令に従って船による将兵の移送が開始されていたので、新着の部隊の任務はドイツ軍を押し戻すのではなく島を離れる軍隊の退却と乗船の後方援護に変更された。命令に従って正当に引き上げている英／英連邦軍をウォーは日記の中で「逃亡者達」「臆病者達」と呼ぶ。これについて伝記作者のマーティン・スタナード（Martin Stannard）は、「彼にとって引き揚げ（evacuation）は国家的屈辱なのだ。ある意味で彼の軍事的態度は英国的というより日本的だった。銃火にびくともしない彼は他人もすべ

てそうであることを期待した。」⁹と述べている。たしかにクレタ島での5日間の軍事行動はウォーにとって初めての实战体験であったが、彼の冷静な勇敢さはレイコックに高く評価された。一方大尉の身分ながらトップに近いことから「虎の威を借る狐」の傾向を見せる彼に上官たちはいらだち、あるいは可笑しがりもしたという。

到着時から司令部の自隊に対する命令を確認しようとレイコックやウォーは奔走するが「最後に来たのだから最後まで残って英軍の撤退を見届けよ」という以外に何ら明確な命令はなかった。海岸に集結している8000余の兵士に対して輸送の船舶は絶対的に不足しており、5月末には、これ以上船舶による輸送を続けて海上で攻撃され船舶と人命を失うよりも敵の捕虜となった方が生き残りの可能性が高いと判断される段階となった。フレイバーグ (Freyberg) 大將が「レイ部隊 (レイコック指揮の部隊)」に後を託して自ら乗船する際に口答で付け加えた「戦闘部隊は他に優先する」という一言を戦闘能力と組織を保持している部隊とあえて解釈したレイコックは、引き揚げ打ち切りの前日5月31日午後、乗船指揮官もすでに去っていることを発見すると自ら責任をとり、レイ部隊に各自力づくでも道を開いて乗船せよとの命令を出した。その上で部隊司令部のためには小さなモーターボートを確保して、夜半までかかって駆逐艦「ニザム (Nizam)」にたどり着き、アレキサンドリアに帰還した。側近イーヴリン・ウォーは勿論この中にいたが、部隊の大半は他の英兵達とともに運をドイツ軍にまかせて弾丸の降り注ぐクレタ島に残された。命令に従った行動として自他を納得させることはできたが、この強引な引き揚げはウォーの良心に生涯翳をのこし、20年後にもなお「レイコックと私の恥ずべき逃亡」¹⁰としてこの件に言及している。ほろ苦くも強烈な記憶となったこの出来事を軸にストーリーが展開する「士官と紳士 (*Officers and Gentleman*)」をウォーはロバート・レイコック少将に捧げている。

ドイツ軍の潜水艦を避けて長時間をかけた船旅の後9月3日にウォーはリバプール港経由で帰還するが、この船旅の間に戦争を背景とした「もっと旗を (*Put Out More Flags*)」を書き上げ翌年3月出版する。軍務に関してはク

レタ島での任務を終えた後1944年夏までは閑とも言える不安定な期間となる。1942年の年明け1月5日からウォーは海兵隊士官として4週間の中隊長養成コースに参加するが、会場はエディンバラにある「ボナリータワー」でイーヴリン・ウォーの母方四代前の先祖にあたるコックバーン卿 (Lord Cockburn) の建てた美しい華族風の邸であった。このコースを終えて常任の中隊長就任を確信していた彼に、3月の編成替えでは任命がなく、非常時(戦時)の必要にせまられた場合以外彼には中隊長の指揮権が与えられない事が告げられた。これを不満として今は特務旅団 (Special Service Brigade) の旅団長となっているレイコックに助けを求めた結果、5月には海兵隊からレイコックの所属する陸軍の近衛騎兵隊へと移籍が実現した。セリナ・ヘイスティングスが「スマートな連隊中でも最もスマートな」と形容するこの連隊に入ることはイーヴリン・ウォーの夢だったので彼の有頂天の喜びは妻への手紙からも伺われる。しかしここでも1943年3月の連隊編制替えで彼の昇任はなく、レイコックから彼は「あまりにも不人気で使いようがない」状態なのだと告げられる。¹¹

1943年6月26日父アーサー・ウォーが死去し、兄アレックが出征中のためイーヴリンが取り仕切って母の面倒も見たが、この時はたまたまレイコック指揮の特務旅団司令部が連合軍との共同作戦「ハスキイ (Husky)」に参加するため北アフリカに向けて出発する日でもあった。服喪休暇を与えられ補充部隊に入る約束で彼は残ったが、海外遠征の機を逸したこと、レイコックがあっさりと自分を残して去ったことには不服であった。レイコックとしては、ウォーの参加に強硬に反対する副官と部下の将校たちの上であって困り果てていただけに大いに安堵したのが実情であった。この出勤命令待ちの期間にウォーは統合作戦本部の連絡将校 (liaison officer) の任を与えられたが、勤務態度の悪さで旅団や統合作戦本部の責任者たちから愛想をつかされて、7月17日いわば強いられる形で特務旅団への辞表を提出し特定任務無しの近衛騎兵隊隊員となる。しかしウィンザーの連隊本部での生活も気に入らず、すでに「ブライズヘッド再訪 (Brideshead Revisited)」(1944発行)の構想を内に持っていた彼

は9月に友人のつてを頼って陸軍省に「著作のための無期限の休暇」を願い出て当局を驚かせる。一方、10月にはウィリアム・スターリング大佐 (Colonel William Stirling) に招かれて新しく編成される特務航空連隊 (SAS = Special Air Service Regiment) に入隊し、ここで生涯の友人また伝記作者ともなるクリストファー・サイクス (Christopher Sykes) と出会う。11月の出撃予定が取り消されて手の空いたSASの将校たちをあつめて彼らはマンチェスター近郊で行われたパラシュート訓練に参加するが、12月にウォーは着地に失敗して膝に大怪我をしてしまう。三部作の最終巻「無条件降伏 (*Unconditional Surrender*)」で用いられている経験である。秋に申請していた長期休暇が1944年1月末に認められたので療養かたがた執筆に集中し、途中陸軍省から休暇を取り消されながらも駆け引きで延長をくり返して6月初旬に「ブライズヘッド再訪」を脱稿した。この小説の前書きでウォーは軍隊の理解ある処遇について謝意を表しているが、それというのも彼がレイコック以外誰からも部下として望まれない困りものだった故にできたことと思えば皮肉である。

1944年6月下旬ウォーが部隊に戻ってくるというので連隊長ブライアン・フランク (Brian Frank) が当惑し処遇を考えあぐねていた矢先、突然上層部の計らいでウォーのユーゴスラヴィア派遣が決定され即時実行された。1941年6月の独ソ開戦でユーゴスラヴィアが独伊軍に占領されて以来、イギリスは抵抗運動を強力に支持して来たが、1944年当時の政策はチトー元帥 (Marshal Tito) の率いるバルチザンへの支援であった。チャーチル首相の息子でウォーの学友ランドルフ・チャーチル (Randolph Churchill) はイギリス軍事使節団を率いるフィッツロイ・マククリーン旅団長 (Brigadier Fitzroy Maclean) の下にあってユーゴスラヴィアで軍務についていたが、上官と父首相の承認を得てクロアチアで「カトリック信者とロシア正教信徒の間の深い溝をうめる」役割の果たせる協力者としてイーヴリン・ウォーに誘いをかけたのであった。6月29日にロンドンで会ったランドルフ・チャーチルとウォーは7月4日には出発したが、立ち寄り所も多かった旅の終わり近く搭乗機が事故を起こした。二人とも命は取りとめたものの怪我の治療のためイタリアで時を

過ぎ、クロアチアのバルチザン本部のあるトプスコ（Topsko）着任は8月末であった。二人の任務はチャーチルが主任、ウォーは副主任の格でバルチザンに対してイギリス軍を代表する大使役を果たすことであり、本部との連絡と軍事的状況報告、ロシアを頼りにしやすいバルチザンをイギリス側に引き付けるための宣伝活動、空輸される援助物資の受け取り配分の監督などで忙しいものではなかった。10月にはスラヴ語の出来る者を含む2名の増員もあったが、チャーチルとウォーはそれぞれ名うての我がまま者であったから日が経つにつれて折り合いが悪くなっていった。

しかし12月に入るとウォーにはドーブロブニク（Dubrovnik）でマクレーン軍事使節団代表としてバルチザンに対応するよう命令が下り、4日には新しい任地に着いた。着任早々ウォーは上司マクレーン旅団長にこの国の「宗教的状况の調査と報告書作成」の許可を願い出て与えられると、彼の最後の戦時活動を開始した。これは自分の関心に従って行った調査で、共産政権下のカトリック教会の状況を直接人々の話から把握しようと彼は高位聖職者から信徒まで非常に多くの人々に面接した。しかし、彼の共産党嫌いが知られるとこうした調査熱心は上官から危険視され、教会人から引き離されるようになる。彼自身も、政権への自信にあふれたバルチザンに押されてイギリス軍の陰が薄い任地からの召喚を希望していたので、念願の帰還命令を受けて1945年2月20日、ドーブロブニクから旅団本部のあるイタリアのバリに向けて帰途についた。彼の計画は、共産政権によるカトリック教会迫害を実証する調査結果を持ってローマ教皇に会い、許可を得て報告書を作成し、イギリスに帰って積極的関心を示していた外務省に提出、そこから現地のフィッツロイ・マクレーン旅団長に伝えてもらい、何らかの手が打たれるのを期待するというものであった。バリからローマに出て数日の交渉の後3月2日教皇ピオ十二世との個人謁見の機会を得る。教皇の反応は穏やかな同調の域を出なかったが、自分の気持ちを分かってもらえたウォーは満足した。この後ローマ滞在中に「解放クロアチアにおける教会と国家（Church and State in the Liberated Croatia）」と題した7500語程のレポートを作成している。3月15日にロンドンに戻りイギリ

スの教会や政界にレポートを流そうと努力し、また、たまたま帰国したフィッツロイ・マクリーンにも提出したが、成果はなかった。イギリス政府の立場としてチトーとの関係を損なうことは受け入れられず、また註ユーゴスラビアの英国大使からは内政干渉として一蹴された。ヘイスティングスが指摘するところによれば、内容的にも客観性に欠ける面のあるレポートであった。¹²

「名誉の剣」の最終巻「無条件降伏」はユーゴスラヴィア体験を扱うものであるが、この調査の体験はそれと分かるような形では使われていない。歴史としてはこの後5月のドイツ降伏、8月の日本降伏をもって第二次世界大戦は終わりを告げるが、ウォーの生涯にあってこれらの勝利はそれほど意味を持った出来事ではなかったようである。小説の題とされた「無条件降伏」は戦争用語としての降伏を意味するものではない。彼は1946年ニュールンベルク裁判にも招待されて出席しているが、これに関するコメントはどこにも見当たらないと言う。1945年9月18日、ウインザーの近衛騎兵隊本部での動員解除をもってイーヴリン・ウォーの戦争体験は終わった。しかし、内面的戦後処理は1961年「名誉の剣」三部作の完成までかかるのである。

2. 「戦争三部作 名誉の剣 (*The Sword of Honour Trilogy*)」

「戦士 (*Men at Arms*)」(1952)

「士官と紳士 (*Officers and Gentleman*)」(1955)

「無条件降伏 (*Unconditional Surrender*)」(1961)

「戦争三部作名誉の剣 (*The Sword of Honour Trilogy*)」(1964) (ペンギン版合本 1984)

この連作は第2次世界大戦から生まれた作品には違いないが、戦争小説という言葉から連想されるような写実的なものではない。戦時体制と戦場という枠組みの中に作者の体験を素材として組み立てられた人生の旅路の物語である。時代設定は1939年から1945年までの世界大戦中とエピソードとして1951年に触れるが、テーマ的には「家柄」「大義への献身」「信仰」の三つ

の関心事が緋い合わされて生々流転の底流をなし「名誉」の道を求めて行くのである。これはウォーの内面で起こっていた20世紀に対する騎士道の挑戦と言えるかも知れない。

主人公ガイ・クラウチバック（Guy Crouchback）はイギリス国教会からの迫害に抗して続いてきたカトリック貴族の三男である。国会議員と結婚している姉と二人の兄があるが、兄の一人は第一次大戦の戦場に斃れ、もう一人は狂気のために死亡したので家督相続人の立場にある。クラウチバック家は、ヘンリー一世時代（12世紀）から続いている荘園つき邸宅「ブルーム」を本邸として、イタリアにガイの祖父ジャーヴェイスが購入し愛妻の名を冠した別邸ヴィラ・ハーマイオニー土地の人々はクラウチバック城と呼んだ—を持っていた。ガイはケニアで農場を経営していたが結婚に破れ、傷心を抱いてこの城に帰って来ている。妻を早く失いすでに70歳を超えている父アーサー（Arthur）・クラウチバックは、「ブルーム（Broom）」を修道院に貸して海辺の小さな町マチェット（Matchet）でかつての使用人が経営するマリン・ホテルに長期滞在者として隠居した。かつては有能な領主であった彼は、家柄に関するはかり知れない誇りを持ちながらも、運命を嘆くこともつぶやく事もなく静かな祈りの人となっている。

結婚の失敗で家名を継ぐ子を持ち得ず、ヨーロッパに戦雲がたれこめる中で、共産主義とナチス嫌いではあっても単純な反ファシズムの風潮には乗れず、信仰も惰性で実践している自分をもてあまして恥と淋しさのうちに年を過ごしていたガイは、1939年8月23日独ソ同盟の締結に救いを見出すのである。反宗教の共産主義とナチズムが手を結んだことで、

今や見事にすべてが明らかになった。とうとう敵がすべての仮面をすてて巨大で憎むべき姿をはっきりと現した。それは武装した現代だった。結果がどうなるうともこの戦いには彼の間があった。13

というわけで今イギリスの軍隊に志願することは正義の戦いへの参加であり、

明らかな大義への献身となる。彼は朗らかな気持ちで帰国するのである。ここでガイが敵としているのは自由主義国を侵略する脅威としての独ソ軍よりもむしろ彼らに代表される唯物主義の「現代」であることが三部作を通しての「戦い」の性格を規定する。城のあるサンタ・ドゥルチアを離れる日、ガイは村の教会堂内にある中世のイギリス人騎士ウェイブルックのロジャー（Roger of Waybrook）の墓に行き、土地の漁師たちがするように彼の像の剣を撫でて「サー・ロジャーよ、我がため、また危機に瀕したる我が王国のために祈り給え」と言う。これを彼は自分の「献身」として繰り返し思い起こし軍人としての生き方を律するよすがとするのである。帰国の後父の支持も得て彼が入隊するのはその名も中世的な「矛槍隊（Royal Corps of Halberdiers）」で、輝かしい戦績と紳士の伝統を誇る隊であった。海兵隊入隊当初のウォーがそうであったようにここでのガイには何もかも気に入り幸せな仲間意識を味わう。隊内唯一のカトリック士官として信者の兵を日曜日のミサに引率して行くが、説教の中で司祭が「私たちが生きているこの大変な懷疑と危険と苦しみの時」と言った時にはむっとして「栄光と献身の時」だと思うのである。¹⁴ この前向きの時期にあって同期入隊の仲間のうちガイがはっきり嫌いだった唯一の人物が後にトリマー（Trimmer）と呼ばれるマックティヴィッシュ（MacTavish）であることに注意しておきたい。しかし、このガイ・クラウチバックという人物にとって物事は起こってくるものであって自ら引き起こすものではない。この受身性が多くの批評家から主人公の性格の弱さとして指摘され、退屈な人物、馬鹿者¹⁵とまで酷評されることがあるが、同じ作品の中で輪郭のはっきりしたウォー独特の可笑し味と風刺のきいた人物を何人も創り出している作者が、3冊を通して狂言回し役となる主人公をこのような人物に設定したのには別の意味があるのではないだろうか。ガイ・クラウチバックという一つの人格の上を歴史が流れて行く。彼の経験を舞台として旧時代の理想や価値観が現代と戦いを演じる、その戦いは通奏低音のように途絶えることなく奥底を流れる信仰のいのちと響き合って永遠の次元に何かの音をひびかせて行く。そうした人間存在の神秘を垣間見せる場として作者はガイを読者に提示しているのではないかとも思われ

るのである。さまざまな行きがかりでスパイ容疑をかけられたり、責任のないことで不利をこうむってもガイは黙っていることが多い。自己弁護することは矛槍隊員として恥ずかしくないかと我が身に問い、サー・ロジャーへの思いと騎士的な理想を捨てない故である。時間的な経過がカトリック教会の典礼歴に従って灰の水曜日、聖木曜日、復活の前夜、復活祭などで示され、戦争の最中にも敵味方の地上的抗いを超えて等しく行われている典礼や祭儀に触れる部分が全体に散りばめられていることにも同様の意図が窺われる。

第1巻となる「戦士」の中で先ず際立っているのはガイと同期で同じく年配者であるアプソープ (Apthorp) と彼等の上官ベン・リッチーフック旅団長 (Brigadier Ben Ritchie-Hook) である。アプソープは骨董品の収集家で持ち物の中から軍隊用携帯便器を隊に持ち込みガイだけには見せたが秘密の宝物として大切にしている。これに目を付けた旅団長とアプソープ＝ガイ組の宝隠し攻防戦は秀逸であるが、旅団長に宝物を爆薬で粉砕されたショックでアプソープは常軌を逸するようになりアルコール中毒で身を滅ぼす。入院中の彼を見舞ったガイは旅団副官の示唆で厳禁のウイスキーを持参し、結果的に彼の死を招くが、譴責に言い訳せず、また良心の痛みも感じない。もはや回復の望みのない状態にあって生きることを望んでいなかったアプソープはこのウイスキーとガイの友情に力づけられて生前の嘘を告白し、ガイに後事を託して安らかに逝ったからである。独眼のリッチーフック旅団長は第1次大戦の生き残り英雄で、彼の演習目的は常に「叩きつけること (biffing)」であり、自分の年齢、地位、立場を無視して戦闘には必ず参加する人物である。ダカールの夜間偵察の場面には彼のグロテスク趣味も合わせて変わり者旅団長の面目躍如たるものがある。彼はストーリーの中でも神出鬼没で最終巻にまで登場して、視察者へのデモンストレーションのために仕組まれた小さな戦闘で戦死してしまうが、作中人物として見事にはっきりした輪郭をもつこの個性派將軍のモデルはウォー自身の入隊時の旅団長だという。

伏線として重要なエピソードの一つは、ガイが知り合った系図研究を趣味とする元校長のミスター グッドールから聞いた事として、あるカトリックの名

門貴族が離婚した女性と10年後に会って和解ができ、彼女は彼の子を宿すが生まれた子は現在の夫の子として認知されているので、高貴な血筋は別の名の下に生き続けているのだという話がある。神の権威のもとに結ばれた結婚の絆は生涯のものなので、たとえ市民法上離婚していても相手の生存中は神の目に正しいとされる結婚はできないという教会の掟のもとに生きているガイは、元の妻との再度の結婚ならば神学上問題ないと知って離婚した妻ヴァージニアとの関係を修復しようとするが、アプソープからの度々の電話で邪魔された上、ヴァージニアがガイの動機を知って激怒したので、愛の復活とクラウチバック家の世継ぎにかけた夢は実らなかった。

1940年6月になるとドイツ軍によるイギリス本土の空襲が開始されるが、三部作の第2巻「士官と紳士」の幕開けは逼迫した戦況を暗示して空襲で炎上するロンドンの情景である。ダカール夜襲に関する審問のためにリッチーフック旅団長と二人召喚されてロンドンに戻っているガイはこの炎を復活祭前夜、聖土曜日の夜に行われる「火の典礼」の炎のイメージと重ね合わせて見ている。審問の結果ガイの潔白は証明されるが、こうして「サー・ロジャーの墓所からはじめた巡礼」は「第二段」に入るのである。その第一歩は「友愛 (*pietas*) の行い」¹⁶として亡くなったアプソープの遺言の実行、つまり彼の膨大な収集品を彼の望んだ人物に届けることで、荷物の一時預け先や輸送手段の工面には、ほのぼのとした人柄の退役将校「ジャンボ」・トロッター ('Jumbo' Trotter) が援け手として登場する。「諸聖人の祝日 (11月1日)」も過ぎる頃与えられたガイの新任地はマグ島で、彼の妻ヴァージニアの第二の夫であったトミー・ブラックハウス大佐 (Colonel Tommy Blackhouse) の指揮下にある訓練基地である。ここで彼はアプソープの荷物の受け取り人に指定されたチャティ・コーナーことジェイムス・ペンデニス・コーナー (James Pendennis Corner) に会い、「霊を鎮める」仕事を完了する。

この基地は異なる部隊からボランティアを募って構成された突撃隊の訓練のための施設であり、ガイは内容不明の「特務」のために予備隊からこの隊に派遣されたことになっている。隊員の中には馬術のプロとして完璧な演技をす

る姿をガイが見たことのある容姿端麗な貴族アイヴォー・クレア (Ivor Clair) がいて二人は友情を結ぶ。アイヴォーの部下のルドヴィック (Ludovic) はことばに強い興味を持っていて軍隊内の観察をノートに書きためているが、この人物をガイは最初から嫌ったことに注目しておきたい。もう一人ガイが矛槍隊入隊の時から嫌いだったトリマーもマックティヴィッシュと名乗ってここにいる。もとは長期航路の豪華客船つきの理髪師で、女性関係がだらしく臆病ではったり屋という彼の性格は、ミセス・トロイ (Mrs. Troy) (= ヴァージニア) との関係、ノルマンディーに間違っ上陸した際の臆病風を吹かせるみじめなリーダーぶり、その彼が鉄道を爆破した部下の気転とフリートストリート出身のベテラン記者である同僚イアン・キルバーノック (Ian Kilbannock) の筆力によって一躍国民的英雄に祭り上げられて行き、映画まで作られてその中の小道具だった短剣が国王にヒントを与えて英国民からソ連に贈る「レニングラードの剣」が作られるに至るまで、この作品に入念に組みこまれた諷刺の担い手として用いられる。アプソープのように強烈的な輪郭はなく我知らず何かを引き起こすトリマーはまた彼なりの役まわりを演じているのであろう。ガイの方も招待された先で相客の女性から渡された宣伝ビラがプロ・ナチスのものだったところから知らぬ間に上司たちの間でスパイとして疑いをかけられ機密にかかわる作戦行動からは外されることになる。

最後に三部作の中編の抑えとなるのがクレタ島の場面である。前述の通りこれは難戦中のイギリス軍への援軍として派遣された突撃隊の隊長に身近に従って得た情報と体験に裏打ちされているだけに、各部分の描写には迫力がある。実体験と同じくガイの部隊が到着した時にはすでに勝敗は決しており、突撃隊は戦いらしい戦いをすることなく、自隊への命令を求めて司令官を探す道行と、そこで与えられた命令の実行が主な任務となる。全軍には退却命令とともにダンケルク撤退の場合とは異なり引き揚げ船の入港は打ち切られる、残された者は独軍に降伏せよ、との指示が出されている中で突撃隊に与えられたのは、全体の最後を見届けてから避難せよとの命令であった。つまり全員ドイツの戦争捕虜となることに生き残りを賭ける運命である。ドイツ軍の空襲が続く中で英

軍に既に戦意はなく、引き揚げ船が彼らのために残した糧食が尽きた後は飢餓にさらされることになる。混乱のなかで共に彷徨い、別れ別れになるファイド・ハウンド少佐(旅団副官)、ガイ・クラウチバック大尉(中隊長)、そして、ルドヴィック伍長。極限状態のなかで上級将校ファイドの名誉(honour)は盗みを働くまでに地に落ち、最下級の下士官の生存意欲の前に命さえ消されてしまう。一方ガイは教会の境内ですでに腐乱のはじまっている英兵の遺体を囲んで涙ぐむ3人の現地人の娘にあい、飢餓を超えたもうひとつ別の命の体験をする。言葉によらないコミュニケーションで彼は兵士の埋葬を彼女らに頼み、彼がカトリック信者であったことを示す円票を持ち帰る。翌日の夜明けに降伏すると決定され船出も最後となる日、引き揚げ港スパキア海岸の洞窟にいたガイのもとにアイヴォー・クレアが現れる。アイヴォーの思いは降伏から名誉へ、そして決闘におよび、道徳神学者にも決闘は止められなかったが、民主主義になった今は、決闘を申し込まれたら人は笑うだけだとするガイに対して「次の戦争で、俺たちが完全に民主的になったら、将校が部下を置き去りにするのはまったく当然のことになるんだろうな」という皮肉な見通しを述べ、「名誉の道は丘の上にある」と言い残して去って行く。名誉に命をかけた時代からそれを一笑に付する時代へと変えたのが民主主義の力ならば、その流れの先には今不名誉とされる行為を正当とする時代がある筈で、名誉というものを人間の価値体系から消し去る体制が民主主義なのだとする。これは時流に逆らう作者ウォーの社会観である。ガイとルドヴィックはこの後工兵隊員が修理した小舟の最後の空席をうめて脱出を試みるが、海上での衰弱で精神に異常をきたしたルドヴィックに被害妄想的な憎しみを抱いた工兵のリーダーはガイが意識を失っていた間に姿を消している。救助された後ガイは、意識のない彼を担いで岸にあげたのはルドヴィックだと聞かされる。彼が今は命の恩人になったのである。次にガイはアイヴォーが彼よりも早く引き揚げ船で帰って来て、英国大使スティッチ(Stitch)夫妻の配慮で今は軍の譴責の届かぬ植民地インドに落着いていると知って、心に抱いてきた誇り高き貴族将校アイヴォー・クレアの像が地に碎け落ちるのを体験する。彼の国外脱出の事情は上流社会の名誉を支え

ている偽善的からくりを垣間見せて、ここでも内心の偶像破壊を引き起こす。

そして1941年6月22日ドイツ軍がソ連国境を越えて侵入し独ソ開戦となるが、これはソ連が連合軍側につくことでもあるのでイギリスは突如ソ連ブームにわき、スターリンは「ジョー小父さん」とまで呼ばれて国民の人気を集めるようになって行く。しかしガイにとってこれは晴天の霹靂である。はっきりとまとまっていた敵の姿が割れて敵の因子が味方の中に混じり込んで来ることになるからである。

彼が独ソ同盟の事を読んだのは丁度2年前、晴れて地中海らしい風のそよぐ日だった、恥らいの10年間が光と道理のうちに終わり、敵が全ての仮面を棄てて巨大で憎むべき姿をはっきりと現わした；それは武装した現代だった。

今やそのまほろしは鯨と海亀のようにクレタ島からの船路で消え去り、彼は幻想の聖地への2年足らずの巡礼から昔ながらの不確かな世界、司祭はスパイであり勇敢な友は裏切り者とわかり、彼の祖国は不名誉に向かう迷走へと導かれて行く世界へもどってきた。¹⁷

アレキサンドリアのスティッチ夫人のもとで療養中だったガイは命令を受けて帰国するが、別れ際に英兵の遺体からはずしてきた宗教を示す円票を夫人に託す。夫人は機嫌よく受け取って彼を見送った後、屋内にもどるや涙をためて円票の入った封筒をチリ箱に落とすのである。「武装した現代」へのガイの挑戦は敗色が濃くなってくる。クレタ島の降伏で臨時的大尉昇任の任期が終わり中尉としてイギリスに戻ったガイが軍隊生活の感覚を取り戻すため初心者に交じって基礎訓練をはじめるところでこの小説は終わる。

「無条件降伏 (Unconditional Surrender)」は第二次大戦の折り返し地点とも言うべき1943年からはじまる。再訓練を終えたものの年齢を理由に矛槍隊の海外遠征からはずされたガイは、しばらくの休暇を得て父を訪ね1943年9月8日イタリア降伏の時にはマチェットのマリン・ホテルに居る。イタリ

ア情勢についての父子の対話には政治的に発想するガイと魂の救いを中心に霊的教会的に判断する父が対照的に描かれる。後日兵營に届いた父の手紙はこの時のラテラノ条約に関する意見の相違に触れて、教会の現世的勢力の減少を問題にするよりも、この条約によってどれほど多くの人に和解と平和な死がもたらされ、どれほど多くの子ども達が信仰のうちに育てられる事になったかを考えた事があるかと問い、

数量的判断は通用しません。たった一人の魂でも救われるなら、どんなに多くの面子が失われても十分に報われるのです。¹⁸

と書く。この小説ではこの言葉がガイの思考や行動のキーワードとして加わり、ガイの視野には「自他の魂の救い」が入ってくる。しかし一方、「ジャンボ」・トロッターから快適な彼の住まいに「いつまで居てもいいんだよ」と言われれば、心中「4年前の希望に満ちた朝、自分がロジャー・ウェイブルックの剣に触れて我が身を奉献したのはこのためではなかった」と反応するガイであり、騎士の剣に象徴される名誉の理想はまだ生きている。

前2巻で触れられて来た名誉と剣のイメージはこの巻の第1章「国の剣」の痛烈な皮肉に結実する。先ず当時の戦況としては、1942年6月22日に国境を超えたドイツ軍はソ連本土の奥深く進んだが、9月29日に始まり1943年2月に及ぶ「スターリングラードの戦い」でソ連側は市民もろとも不退転の抵抗を見せ、ヨーロッパの戦況を連合軍優位へと逆転させた。これを踏まえて小説では国王の命によって「鋼鉄の心を持ったスターリングラードの人々へ」と銘打った装飾刀剣が代々の英国王の儀式用刀剣を作ってきた名工の手で造られ、ウエストミンスター寺院の中心、創建者エドワード懺悔王を始め歴代の王廟のある聖域の脇に、祭壇を擬して二本のローソクを灯したテーブルの上に飾られている。人々は長蛇の列を作ってこれを鑑賞しに訪れるという状況。戴冠式の行われる寺院で、イギリスの名誉と伝統の象徴である王室の座を篡奪するかのように共産主義国の榮譽を称える贈り物が英国国民によって崇めら

れている。しかもスターリングラード記念日の9月29日はガイの40歳の誕生日という設定である。

次にガイの依存してきた階級的秩序の相対化の立役者としてはルドヴィックとトリマーがいる。下層階級出身で気品や矜持とは無縁の人柄、最初からガイが嫌った二人の人物である。ルドヴィックはすでにクレタ島脱出でガイの命の恩人になったが、もの書きを趣味とする彼がクレタの体験をもとに書いた詩や文が出版社に認められ、遂には通俗小説を書いて大変な人気を博し産を成してゆくあたり、また特に彼が殺害した2人の人物の記憶につきまといわれ、ガイが秘密を知っていると信じて戦々恐々とする有様を喜劇的に織り交ぜながら、内的には軽量のルドヴィック像を読者の想像の中で膨らませて行くところは熟練の技と思われる。ルドヴィックを引きたてた編集者エヴェラード・スプルス(Everard Spruce)はシリル・コノリー(Cyril Connolly)を、彼の主宰する文化誌「サヴァイヴァル(*Survival*)」はコノリーの「ホライズン(*horizon*)」誌を下敷きにし、「死への望み(*Death Wish*)」と題されたベストセラー小説に関する部分はウォーの「ブライズヘッド再訪」への自己批判とこの作品が英米両国、特にアメリカで爆発的人気を博したために一躍財産家になった自分への風刺のようであるが、自分をこのように突き放して揶揄できるのは強靱な理性の持ち主だけであろう。コノリーからはこの場面の戯画化に友人らしい苦言が呈され、ウォー自身はこのモデル説を否定している。¹⁹

トリマーの姿は最終巻においては影の人物であるが、英雄として扱われながらヴァージニアを追いかけて嫌がられ続け、遂にトニー・ブラックハウスの命令でアメリカに送られる。しかしその後ヴァージニアは彼の子を身ごもっていることを発見して窮地に陥り、最後の手段としてガイに助けを求めることになるのである。ヴァージニアとの関係でガイがなし得なかった最も大切な事をルドヴィックがなし遂げたことになる。

離婚した夫婦として改めての結婚をガイが求めた時にヴァージニアは怒って拒否した。今、他人の子、人もあろうにトリマーの子を宿していることを明らかにしてヴァージニアが求めた時、ガイは承諾する。イアン・キルバーノック

の妻でヴァージニアの親友カースティ (Kirsty) も、このガイの行動にはあきれられるほかない。認知されない子どもたちは大勢いる中で一人を認知したからといって全体の惨状がどうなるものでもない、という彼女の理屈にガイは答える。

「僕はほかの子たちみんなについては何もできない。これは僕が助けてやれる一件で、実際僕しかいないのだ。僕はヴァージニアの最後の拠り所だった。だから他にどうしようもなかった。それが分からないのか？」²⁰

勿論カースティには分からない。彼女が「あなたは気狂いよ。」と言い捨てて去った後、ガイは改めて亡き父の手紙を読み返すが、「数量的判断は通用しません。たった一人の魂でも救われるなら、どんなに多くの面子が失われても十分に報われるのです。」という部分を再度全文引用してウォーは第2章を終わっている。読者の価値観へのチャレンジであろうか。

こうして結婚した二人の間には最初の結婚の時とは違った穏やかな優しさが生まれてくる。ガイはヴァージニアを父の弟ペレグリン (Peregrine) ・クラウチバック叔父宅にのこし、姉アンジェラ (Angela) にも世話を頼んで新任地ユーゴスラヴィアへ旅立つが、ヴァージニアの手紙と一緒に届いた姉からの手紙で、母子のカトリック入信、直撃弾による叔父とヴァージニアと家政婦の死、ただし嬰兒ジャーヴェイスはアンジェラのもとで無事であること等を知り、現地の教会でミサを捧げてもらい彼らのために祈る。現地語を知らない彼は司祭とラテン語で話をする。当時は世界共通の教会用語としてのラテン語、世界共通のミサの典礼があり、祈りの形があった。しかし、本意が何であれ変わったコミュニケーションの仕方はスパイ容疑を招きやすい。これはガイの信仰実践の副産物として小説のプロットを複雑にする要因でもある。ドイツ占領下の共産党支配とパルチザン、連合軍としてのイギリス軍の駐留、カトリックとオーソドックスの入り混じるキリスト教会事情、現地人とユダヤ人難民など複雑なバルカン事情の上に連絡将校の仕事はあり、身分上、人々の窮状を理解しても上に伝える以上のことは出来ないもどかしさや無力感は作者自身のものでもあった。

また、共産党員のフランク・デスーザ (Frank de Souza) とカトリック信者のガイの協働関係も面白い。ガイはユダヤ人難民の保護と国外脱出に努力して実現させ、その間に知り合いになったカニイ夫人 (Mrs. Kanyi) とは人間社会について深い話の出来る間柄になるが、彼が与えた英文雑誌がもとで外国との接触を疑われ彼女は国外脱出を阻まれて収容所送りとなる悲劇も体験する。連合軍優勢となった状況で彼はさらにドーブロブニクでの勤務をへて1945年に帰国する。

イギリスでは彼の留守を守って姉アンジェラと嬰兒の洗礼時に代母をつとめたエロイーズ・プレシントン (Eloise Presington) が幼いジャーヴェイスの世話をしている。彼は「良い子」でエロイーズの娘ドミニカ (Dominica) からも可愛がられている。

3巻全体を通して重要な役割をはたしながら諷刺的要素や皮肉を含まないのが父アーサー・クラウチバックの周辺である。サイクスによればこの父親像はイギリスで最も古いカトリック貴族の一つと推定されるスコープ家の当主ハリー・スコープ (Harry Scope) をモデルとしたという。ガイの心は折あるごとに晩年の父の祈りとおだやかな隠棲の姿に戻って来る。彼にとって父は「最良の人、彼の知る唯一の完き善人」²¹ なのであった。父の死と葬儀に関連した部分には、イギリス貴族伝統の盛儀としての最後の輝きを盛り込みたかったウォーの好みも窺われるが、ところどころ目線が内に向く時には、読者を意識した小説家というよりも神の前の一個人、場合によっては一神秘家としてのウォーが顔を出しているように思われる。達者なストーリーテラーとして彼を評価し期待する批評家からはロマンティシズムに墮した部分として批判され勝ちであるが、晩年の作品であるこの小説には書かずにいられなかった部分であろうし彼の筆力をもってして初めてなし得た表現なのではないかとも思う。

「英国祭り (Festival of Britain)」と題されたエピローグはごく短いものであるが、ここでこの長編小説の骨格が明かされるのである。ガイ・クラウチバックはドミニカと幸せな結婚をしており、ジャーヴェイスの他に自分たちの子どもが2人いる。クラウチバック家のかつての邸宅「ブルーム」の一画、上級の

使用人の家に住み農園を経営して成功している。幼ジャーヴェイスにはペレグリン叔父からの多額の遺産が与えられているし、ガイは旧知のアメリカ人将校で今はルドヴィックの片腕になっているパドフィールド (Padfield) の世話で、イタリアのクラウチバック城を、著作で大金持ちになったルドヴィックに売り渡したところである。このような情報を一まとめにして姉婿のトミー・ボックスバンダー (Tommy Boxbender) は明らかな嫌味を響かせながら「そうさ、万事ガイに好都合に運んだんだ。」とコメントする。これが全篇の締めくくりである。

一見結構ずくめのようなのであるが、作者イーヴリン・ウォーは「この話はハッピー エンディングなのだという印象を一般に与えてしまったらしくて気になっている。」と言い、「それはまったく私の意図ではないのだ。ガイに正当な子供を持つことを許したのが間違いだった。今後のどの版からも彼らを消そう。わたしは恵まれたジャーヴェイス・クラウチバックの本当の世継ぎがいてトリマーから押しのけられる方がもっと皮肉だと思ったのだが、そこをはっきり出せなかったようだ。それでペンギン版には実子はなしだ。」とアンソニー・パウエルへの手紙に書いている。²² 批評から見ると1965年に出た版にはこの変更があったようにも窺えるが、²³ 現在ペンギンから出ている総合版にこの部分の削除はない。

国家の誇りも大義への献身も、すでに物語のなかで「現代」の前に敗北を喫した。ここで見るのは家柄の誇りである。血筋から言えばガイの現在の妻ドミニカの実家プレシントン家は貴族であって実子二人に問題はないが、彼らに優先して12世紀から続いてきたカトリック貴族クラウチバック家の当主となるのは、個人としてもガイの嫌悪した理髪師の子である。ここには先にミスターグッドールの話として設定された血筋の流れが正反対の形、高貴な家名が卑しい血筋に冠されるという流れで上流階級の下層階級への降伏の図式として提示される。これはガイが自ら選んだ道であり、彼は「たった一人の魂」を救うために名門貴族の「面子」を差し出したことになる。「数量的判断」を超えたところで「十分に報われる」ために。

そして祖父の時代から家族の愛の筈であったヴィラ・ハーマイオネ、別名クラウチバック城は「現代」を体現する有能なアメリカ人の世話で最も安手の成り金ルドヴィックの金力の前に降った事になる。家族の伝統、世代から世代へと受け継がれる思い出は「現代」の実用性に席をゆずり、ふるさとの敷地内でも本宅の屋敷ではなく付属する1軒の家に住み農場経営に従事する。「現代」に立ち向かったガイの十字軍的戦いが全面降伏に終わった今、成し遂げられていたことはこの世の名誉ではなく魂の救いであった。作者イーヴリン・ウォーの生涯の軌跡と合わせ考える時、この戦争3部作は、20世紀の社会に前世紀的な貴族の生活と変動せぬ価値体系を求め、ある意味では時流に逆らって後ろ向きに生きようとして来た自分自身に対する壮大な諷刺と神の摂理への信仰告白なのではないかと思われるのである。

この作品の評価はウォーの後期作品の常として、この戦争から生まれた最高の小説²⁴とする賞賛から酷評まで両極に分かれる。その分岐点は彼の扱うイギリスの上流社会への反応の違い、そして全篇を通して底流にあるカトリック信仰を共有しないまでも想像の中で受け容れられるか、この次元を外にして若き日以来のウォー作品として諷刺と機智の世界を楽しむことを期待するかと言う辺りにあるように思われる。現代日本の文化的風土の中でこの作品がどれほどの読者の支持を得られるかは未知数である。ただ、内容的な評価は肯定的であれ否定的であれ批評家が一致して激賞するのは彼の英文の明晰流麗な美しさである。彼が愛してやまなかった英語という言語への彼の貢献は不朽のものであるであろう。

註

本稿の中の資料引用はすべて筆者の試訳であることをお断りしておきたい。

- 1 Waugh, Evelyn. *A Little Learning, the First Volume of an Autobiography*. London: Chapman & Hall [1964], Penguin edition, p.190.
- 2 女兒一人は生後24時間を経ずに死亡した。
- 3 Hastings, Selina. *Evelyn Waugh, a Biography*. London: Selina Stevenson 1994, p. 341.
- 4 Unpublished Report from Lieutenant-Colonel Lushington, quoted by Martin Stannard in his *Evelyn Waugh, No Abiding City 1939-1966*. London: J.M.Dent & Sons 1992, p.12.
- 5 Evelyn Waugh to Laura Waugh, 26 September 1940, Waugh, Evelyn. Amory, Mark(ed.). *The Letters of Evelyn Waugh*. [1980], London: Penguin books 1982, p. 141.
- 6 Stannard. *Evelyn Waugh*. pp. 32-33
- 7 Sykes, Christopher. *Evelyn Waugh: A biography*. London: Collins [1975], Revised edition, Penguin Books 1977, p.294
- 8 Waugh, Evelyn. 'Commando Raid on Bardia.' *Life*(International), 17 November 1941. Garagher, Donat(ed.). *The Essays, Articles and Reviews of Evelyn Waugh*. London: Methuen, 1983, pp. 263-268.
- 9 Stannard. *Evelyn Waugh*. p. 32.
- 10 Evelyn Waugh to Dorothy Lygon, 27 November 1962 private collection, quoted by Hastings in her *Evelyn Waugh*. P. 572.
- 11 Sykes. op. cit. p. 311.
- 12 Hastings. op. cit. p. 479. 伝記作者は、このレポートではカトリックの修道士の中に反共テロリズムに加担しているものもあることが見落とされていると指摘する。
- 13 Waugh, Evelyn. *Men at Arms*. London: [1952] Methuen (Uniform Edition), 1986, p. 12.
- 14 Ibid. p. 62.
- 15 Heller, Joseph. Review on *Unconditional Surrender*, *Nation*. 20 January 1962, Stannard, Martin(ed.). *Evelyn Waugh, The Critical Heritage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1984, p. 443.
- 16 ラテン語 pietas は英語の love, friendship, charity 等では表せない宗教的な含みを持つ語である
- 17 Waugh, Evelyn. *Officers and Gentleman*. London: [1955] Methuen (Uniform Edition), 1986, p. 240.
- 18 Waugh, Evelyn. *Unconditional Surrender*. London: [1961] Methuen (Uniform Edition), 1986, p. 17.
- 19 Evelyn Waugh to Cyril Connolly, 23 October 1961. Amory(ed.). *The Letters of Evelyn Waugh*. pp. 577-578. Hastings. p.597 参照
- 20 Waugh. *Unconditional Surrender*. pp. 151-152.
- 21 Ibid. p. 65.

- 22 Evelyn Waugh to Anthony Powell, 31 October 1961. Amory(ed.). *The Letters of Evelyn Waugh*. P. 579.
- 23 Unsigned Review on *Swords of Honour*. 1965(rescension of trilogy; US edition, 1966), *Times Literary Supplement*. 17 March 1966, 216. Stannard (ed.). Evelyn Waugh, *The Critical Heritage*. pp.476-480. 参照。
- 24 Connolly, Cyril. Review on *Unconditional Surrender*. *Sunday Times* 29 October 1961, 31. Ibid. p. 430.

Waugh and War, Focussing on His War Trilogy

Toshiko ARAI

This essay is an attempt to introduce Evelyn Waugh's War Trilogy: *Men at Arms, Officers and Gentlemen, and Unconditional Surrender*, with brief discussion of their backgrounds and literary characteristics. Evelyn Waugh was in the British armed forces throughout the war years from 1939 to 1945. What he experienced in those years in his military and civilian life constitutes the trilogy, which is not the war story in an ordinary sense but a long story of a man's spiritual pilgrimage, a quest for the way to serve the righteous cause against the evil force defined as the 'modern age in arms'. The Protagonist is Guy Clouchback, a divorcee in his late thirties who is the heir to an ancient English Catholic family. The spiritual and moral properties he stands up to protect are faith, the noble family line, and dedication to the righteous cause which means upper-class values.

Thanks to Soviet-Nazi Pact in 1939 he could see the enemy in a concrete form and gladly joined the War. Two years later though, the Soviet Union became an ally of Britain, and his chivalrous ideals in military life were beaten one by one by the reality of the life in barracks and battle fields. In his private life, Guy learned that he can legitimately remarry to his divorced wife, and tried to reunite with Virginia but was refused. However, when Virginia appealed to Guy, finding herself with child of Trimmer a man of lower-class origin whom she and Guy detested, he accepted, recalling in his mind the words of his pious father, 'if only one soul was saved that is full compensation of any amount of "loss of face"'. In consequence, the offspring of someone anything but noble became the heir. In the end

of this quest, when he had surrendered in all sides of his moral front, what was eventually achieved was not worldly honour but salvation of souls. As these novels do not seem to have been translated into Japanese yet, and it is doubtful that such translation, if it was done, would make a great commercial success in the Japanese market, it may be of some use to offer even such a simple note as this on the significant achievement of a great English novelist.